C'n
SCENE
NEWS
CHIBA CITY MUSEUM OF ART
vol.73

Topics

「赤瀬川原平の芸術原論　1960年代から現在まで」
「ブラティスラヴァ世界絵本原画展—絵本を旅する世界の旅」
所蔵作品展「机のうえの旅ー楽しい現代美術」

赤瀬川原平《あいまいな海（スカート）》1963年　千葉市美術館蔵

館長のつれづれだより ～美術館の館長とは～

来館者の皆様にお願いしているアンケートに「館長の専門に関わる展覧会が見たい」いう要望をお寄せ頂きました。「専門とする領域」と、改めて問われると、「さて？」と、思うのです。館長就任の折に取材を受けた新聞の記事のなかにはたしかに、「室町から江戸時代の絵画、なかでも水墨画が専門」、あるいはもう少し詳しく「近世の水墨画を中心に、雪舟派、狩野派、琳派、浮世絵と対象は多岐にわたる」とも書かれています。

しかしわたしは長らく私立大学の教員をしていた関係から、専門を限定して深く掘り下げるというよりは、学生の興味や関心に柔軟に対応し、指導するという姿勢が自ずと身についてしまったのか、専門は絞るよりも広くという方向に進んでいったように思えます。そのことからすれば、学生たちの関心に触発されながらわたしの研究も次第に深まって行ったと言えるかも知れません。

ところで、美術館の館長というのは、美術館のなかのいわば交通整理係のようなものとわたしは考えています。ですから、館長は自分で展覧会を作るのではなく、学芸員の企画する展覧会が滞りなく実現出来るように、その道を均たり拓いて行くといった役割を担わされているのだと言ってもよいでしょう。むろん、展覧会を企画してそれを担当する学芸員から意見を求められれば、わたしも自分の考えを述べたり、必要があれば一緒に行動したりもしています。そういう意味合いからすると、例えば、2012年に館長になって間もなく開催された浮世絵師の溪斎英泉や、今年の春に行われた琳派の絵師・中村芳中の展覧会展などは、上記の新聞記事に照らしてもわたしの専門に属するものと言えます。今後ともこのような機会があれば、進んで取り組んで行く所存です。

ここまで述べてくると、未だわたしが専門とすると言う水墨画に関する展覧会をしていないと思われる方もおられるかもしれません。しかし、幸いなことに、来年の5月には、ピーター・F・ドラッカー教授の収集した水墨画の優品を一堂に展示する展覧会を千葉市美術館ほかで開催することを、当館の学芸員が計画しています。ここで紹介するピーター・ドラッカー教授とは、経済学者で経営学の神様、「マネジメントの父」などとも称えられるドラッカー教授のことです。あの「もしドラ」(岩崎夏海『もし高校野球のマネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』(ダイヤモンド社、2010)のドラッカー教授が、日本美術の愛好者・学徒であり、日本の水墨画のコレクターであることは、あまり広くは知られてはいないでしょう。

ドラッカー教授と日本美術の出会いは、1934年のロンドンでのことで、有名なエピソードがあるように、勤め帰りの道で俄かな大雨に遭い、雨宿りのために入った建物の中にあったギャラリーで開催中の日本絵画展を見たことによるとされています(図1)。ドラッカー夫人のドリスさんは、教授は「めぐり歩くうちに、いつしか心はわしずかみにされていた」「いちころだった」と、2006年に六本木の国際文化会館で行った講演の中で話しています(ドラッカー学会年報2008)。これ以降、美術館や展覧会に足繁く通って、日本絵画の接する機会を持つことに努め、第二次大戦中、ワシントンD.Cにいたときにも、日本美術を収蔵することで有名な同地のフリーア美術館をしばしば訪ね日本美術の鑑賞をしていたといいます。

日本の絵画、とりわけ水墨画の収集は、1959年に初めて日本を訪問した時から始められ、そのときには、式部輝忠筆の「渓流飛鴨図」(図2)などの作品2点を購入しています。以来、雪舟等楊晩年の愛弟子である如水宗淵をはじめ、牧松周省、雪村周継、玉畹梵芳、鑑貞などの室町水墨画、桃山時代の海北友松、池大雅や浦上玉堂などの江戸時代の文人画の優品をドリス夫人とともに収蔵されています。

ドリス夫人は前の講演で、「夫にとって、日本絵画の鑑賞とは、単に異文化体験にとどまらず、人生に必要欠くべからざるものとなっていた。『正気を取り戻し、世界への視野を正すために、日本絵画を見る』と言っていた」とも述べています。教授を知る貴重な一言です。

ところで、ドラッカー教授所蔵の水墨画名品展は、28年前の1986年に東京、名古屋、大阪など4箇所で開かれています。その際、作品の選定、展示の構成、図録の執筆などにわたしは携わりました。「日本での公開は二度とない」という謳い文句でこの展覧会は開催されましたが、それを覆すような、久しぶりの日本での公開になります。103歳でなおお元気で公開の快諾を頂き、その時にはわたしも日本に行きたいと言っておられたドリス夫人でしたが、残念ながらそれを果さず本年10月１日にお亡くなりになりました。心からご冥福をお祈りします。

今後、今回のような形でコレクションの全体を見るチャンスは本当になくなると思います。「20世紀の知の巨人である」ドラッカー教授の経営学やマネジメントではなく、教育や美術の視点によってその像を浮かび上がらせることを目指すこの企画は、ご覧になられる方に、今までとは違った新鮮さをもって教授に接することが出来るものとなるでしょう。多くの方々のお出でをお待ちします。

［館長　河合正朝］

(図1)バーリントンアーケードに隣接するイギリス・ロイヤルアカデミーのギャラリーエリア

(図2)式部輝忠《渓流飛鴨図扇面》
室町時代 ドラッカーコレクション

赤瀬川原平の芸術原論展 1960年代から現在まで

"THE PRINCIPLES OF ART" BY GENPEI AKASEGAWA : FROM 1960S TO THE PRESENT

GENPEI AKASEGAWA

赤瀬川原平は、多彩な顔を持つ芸術家です。60年代に現代美術の分野で活躍し、70年代には漫画家・イラストレーターとしてジャーナリズムの領域に身を置き、70年代末からは小説家・エッセイストとして文学界で名を馳せました。そして80年代中頃以降、美術・文学・ジャーナリズムの境界をものともせず、より自由な立場で軽やかにそれらを行き来しています。多才な芸術家自体は珍しくありませんが、彼のように分野の境界に縛られず、それらを自由に渡り歩く芸術家は、必ずしも多くはないかもしれません。

赤瀬川の経歴を見たとき、そこに奇妙な周期のようなものがあることに気づかされます。彼は新しい分野に足を踏み入れると、最初の5年くらいは、勢いに乗って素晴らしい成果を残します。不慣れな分野にもかかわらず、短期間で高い作品の完成度に到達する器用さも驚くべきものと言えるでしょう。けれども最初の5年が過ぎたあたりから、その勢いは陰りを見せ始めます。そして次の5年間は、ある意味惰性で制作活動を続けているようにさえ見えてしまうのです。

《ヴァギナのシーツ(二番目のプレゼント)》
1961年/1994年　作家蔵 名古屋市美術館寄託

例えば前衛時代、ネオ・ダダに参加(1960年)した頃からオブジェ系の作品をつくりはじめたにもかかわらず、1年後の第13回読売アンデパンダン展に出品された《ヴァギナのシーツ》が、この年の注目作品として読売新聞のコラムで紹介されるという栄誉を受けます。1963年から翌年にかけては、ハイレッド・センターの一員として数々のイヴェントを行い、現代美術界に大きな足跡を残しました。ところが1965年に千円札事件で起訴された頃から、裁判の忙しさもあったでしょうが、小品しかつくらなくなり、制作活動のペースは目に見えて停滞していきます。

漫画家やイラストレーターとして活動した時期にも、よく似たパターンが見られます。1968年末頃から商業誌にイラストを書きはじめた赤瀬川は、1969年より『現代の眼』に「現代考シリーズ」を、70年夏からは『朝日ジャーナル』に「櫻画報」を連載し、パロディ・ジャーナリズムの旗手として活躍します。ところが1973年末に、「資本主義リアリズム講座」に掲載した原寸大千円札の切貼工作が、実際に切貼されて使われるという「第二次千円札事件」が勃発し、それをきっかけに政治的パロディから撤退せざるを得なくなります。その後も1980年頃に小説家としての活動が軌道に乗るまで、イラストや漫画の仕事を続けますが、すでに1976年頃には、「パロディの仕事に苦痛を感じる」ようになっていたようです。

《大日本零円札》1966年 作家蔵 協力：白石コンテンポラリーアート

《『櫻画報』第23号　花嵐・一》1971年
作家蔵 協力：白石コンテンポラリーアート）

『お座敷』より 1970年 作家蔵

小説家尾辻克彦としても、やはり最初の5年間は勢いに乗ります。1978年のデビュー作こそ話題にならなかったものの、1979年の「肌ざわり」で中央公論新人賞を受賞するとともに、芥川賞候補にも選ばれ、2年後には「父が消えた」で第84回芥川賞を受賞します。さらに1983年には初の長篇小説「雪野」で野間文芸新人賞を受賞しますが、やはりこの直後小説執筆のペースがガクンと落ちていきます。

このように新しい分野に挑戦してすぐに大きな成果を上げる一方で、5年くらいすると活動に行き詰まりを見せ、その後の5年間は衰退期に入ってしまうというパターンが、赤瀬川には見られるのです。けれども彼の非凡さは、この衰退期のあいだに、次に向かうべき分野を見つけ出してしまうところにあるのですが。

そもそも赤瀬川は、なぜ新しい分野において短期間で行き詰ってしまうのでしょうか。それは彼が、表現ではなくアイディアで勝負するタイプの芸術家だからかもしれません。20世紀前半、パブロ・ピカソとマルセル・デュシャンという正反対の制作スタイルを持つ2人の芸術家が活躍しました。表現の人ピカソは、自らのスタイルを幾度か変えながらも、膨大な数の絵画を生み出しました。それに対してアイディアの人デュシャンは、便器や自転車の車輪をレディ・メイドのオブジェ＝作品として提示し、モナリザの複製画に髭を描き入れる一種のパロディも制作しましたが、ピカソに比べるとその作品数はかなり少なめです。彼は1913年にレディ・メイドを発明して以来、アイディアとしてのアートの領域に乗り出しましたが、10年後の1923年には芸術制作をやめてしまいます。以後40年を超える残りの人生を、引退した芸術家として、時折余技のような小品を作りながら、チェスや仲間の芸術家のサポートを行って過ごしました。

赤瀬川もデュシャンも、アイディアで勝負する芸術家というのは、ひとつのアイディアでそれほど多くの作品を作ることはできません。例えば赤瀬川には、《宇宙の缶詰》という代表作があります。缶詰の外側にある紙ラベルを缶の内側に貼り直すことで、缶の外側と内側が入れ替わり、それを再びハンダで密封することで、私達をふくむ全宇宙が缶詰のなかに封印されるという、まさにアイディアとしてのアートです。このようなタイプの作品は、１個つくれば充分で、同じモチーフを繰り返し何度も描いたピカソのように、同じような《宇宙の缶詰》を沢山作っても意味がありません。つまりアイディアで勝負する作家は、ひとつ作品をつくるたびに、新しいアイディアを生み出さなければならないという難しい立場にあるのです。

《宇宙の缶詰》1964年/1994年 作家蔵 協力：白石コンテンポラリーアート

赤瀬川は様々な分野を渡り歩いてきましたが、何かを表現し、一から作品を創造することよりも、日常の平凡なモノや現象を、アイディアによってユニークな作品に作り変えるやり方を得意としてきました。さきほどの《宇宙の缶詰》にしても、缶詰のような身の回りにある平凡なアイテムを、アイディアによってほんの少しズラすことで、ユーモアあふれる作品に変えているわけです。漫画家時代にも、ニュースの事件から昔話にいたる日常の情報を、まさにアイディアによってズラし組み合わせることで、パロディ作品に仕立ててきました。また本来ネガティヴであるはずの老いを「老人力」と言い換えたことも、この視点のズラしのヴァリエーションと言えるでしょう。

赤瀬川の芸術は、分野を問わず、視点のズラし、発想の転換といった、アイディアの芸術としての側面を強く持ちます。この手法は初期から現在まで、一貫して見られます。その裏には卓越した観察力があることは言うまでもありませんが、同時に彼が多様な分野を渡り歩き、ある分野を外側から見る経験を積んできたことも大きいと思います。現代美術を外から見ることができる赤瀬川だからこそ、超芸術トマソンのように芸術の外側から芸術を論じるような発想が生まれて来るのでしょう。ひとつの領域で技術をみがく表現の人とは異なり、アイディアの人赤瀬川は、様々な世界を渡り歩くことで、より多くの視点と発想を自らの道具として蓄積してきたのです。

［当館主任学芸員　水沼啓和］

《トマソン黙示録　真空の踊り場・四谷階段》1988年 大分市美術館蔵

関連イベント

■トークショー

「路上観察学会VSライカ同盟」（事前申込／10月22日（水）必着）
出演：藤森照信＋秋山祐徳太子＋松田哲夫
11月1日（土）15：00より／11階講堂にて／定員150名／聴講無料

「原平さんは弟子の七光り」（事前申込／11月5日（水）必着）
出演：南伸坊＋久住昌之＋松田哲夫
11月15日（土）14：00より／11階講堂にて／定員150名／聴講無料

「ハイレッド・センター、内科画廊とその周辺」（事前申込／11月26日（水）必着）
出演：田名網敬一＋谷川晃一＋山下裕二
12月6日（土）14：00より／11階講堂にて／定員150名／聴講無料

※それぞれ往復ハガキによる申込制
※詳しいお申込方法はチラシまたはホームページをご覧ください

■ワークショップ「多元宇宙の缶詰」
インストラクター：奥村雄樹　ゲスト：永井均（哲学者／日本大学教授）
12月21日（日）13：00より／11階講堂にて／定員20名／参加無料
※往復ハガキによる申込制／12月10日（水）必着
※詳しいお申込方法はチラシまたはホームページをご覧ください

赤瀬川原平の芸術原論　1960年代から現在まで

2014年10月28日(火)▷12月23日(火・祝)
［休館日］　11月4日（火）、12月1日（月）
［観覧料］　一般 1000（800）円、大学生 700（560）円
※小・中学生、高校生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料
※（　）内は前売、団体20名以上、および市内にお住まいの65歳以上の方の料金
※前売券はローソンチケット（Lコード：31360）、セブンイレブン（セブンコード：033-362）、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口（12月23日まで）にて販売

当館では、もうすっかりお馴染みとなった「ブラティスラヴァ世界絵本原画展（Biennial of Illustrations Blatislava　以下、BIB と表記）」。今回ご紹介する 2013 年秋に行われた 24 回目のコンペティションでは、たいへんうれしいことに日本から 2 人の受賞者がありました。BIB 参加のために開催地のブラティスラヴァ（スロヴァキア共和国の首都）に届けられたのは、49 カ国 362 人による 446 冊の絵本、総計 2,344 点の原画作品でした。本展覧会では、その中から受賞作品および日本からの参加作品、特集展示として世界各国のユニークな原画作品の数々をご覧いただきます。

グランプリを受賞したのは、スイスの若手ユニット It's Raining Elephants。エヴェリーネ・ラオベ（1982 年生まれ）とニーナ・ヴェーアレ（1984 年生まれ）は、今回受賞した『大洪水』（2011 年刊）がデビュー作となります。この絵本は旧約聖書のノアの方舟の物語が題材になっていて、鉛筆による圧倒的な画面もさることながら、絵本自体のかたちのおもしろさにも注目したいところです【図 1,2】。想像力あふれる画面は、無数の生きものでで埋めつくされ、一見子どもが描いたかのような素朴なタッチの中に、遊び心と思わずニヤリとさせられる毒が効いています。

（図1）It's Raining Elaphants（エヴェリーナ・ラオベ＆ニーナ・ヴェーアレ）
『大洪水』より　2011年　©Evelyne Laube, Nina Wehrle

（図2）出版された『大洪水』　2011年

日本からの参加で、ともにグランプリの次点にあたる「金のりんご賞」（5 人選出）を受賞したのは、はいじまのぶひこさんと、きくちちきさんです。これまで画家として活動してきたはいじまのぶひこさんの『きこえる？』（2012 年刊）は、アクリルで描かれたシンプルな画面がたいへん美しい作品です【図 3】。マットな色彩はどこまでも優しく、静謐な画面にいつしか耳をすまし、引き込まれてゆくことになるでしょう。一方、きくちちきさんのダイナミックな画面は、墨絵を基調に鮮やかな色が重ねられ、黒猫と白猫、対照的な二匹の物語が展開します。『しろねこくろねこ』（2012 年刊）は、手製本に取り組んでいた作者にとって初めての出版本でした【図 4】。

（図3）はいじまのぶひこ『きこえる？』より　2011年　©はいじまのぶひこ

（図4）きくちちき『しろねこくろねこ』より　2012年　©きくちちき

彼らの他に、中国、韓国、メキシコから「金のりんご賞」が、ドイツ、オーストリア、スロヴァキア、スペインから「金牌」が選ばれました。なかでも開催地スロヴァキアのダニエラ・オレイニーコヴァーは、前回の絵本原画展（千葉では 2012 年秋に開催）でも紹介した、スロヴァキア・イラストレーション界の若手ホープともいえる存在です。現代的な技法を駆使し、イラストレーションだけでなく造本自体に深い関心を持つ、ドゥシャン・カーライ門下の新しい潮流を代表するイラストレーターといえるでしょう【図 5】。

受賞作品のコーナーでは、優れた出版活動を奨励する「イノベーション賞」、「出版社賞」、「ブラティスラヴァ市長賞」、「子ども審査員賞」もあわせて紹介します。11 回目を迎える「子ども審査員賞」は、BIB 参加作品の中からスロヴァキアの子どもたちが選ぶ賞で、今回は 9 才から 14 才までの 6 人が審査員をつとめました。受賞した韓国のイ・ギフンによる『ブリキのくま』（2012 年刊）は、細部まで丁寧に描き込まれた画面も審査員の高い評価を得たとされ、アニメやマンガのような構図、勢いのある表現が見られる作

品です【図 6】。この賞にちなみ、当館でも会期中、「ちば子ども審査員賞」の投票を行います。千葉の子どもたちは、どのような作品を選ぶのでしょうか。

(図5)ダニエラ・オレイニーコヴァー
『13歳』より
2011年　©Daniela Olejníková

(図6)イ・ギフン『ブリキのくま』より　2011年　©Gi-hun Lee

(図7)モハンマド=アリー・バニーアサディ
『戦争と平和のお話　ホダーイーさんのおんどりとヘイリーエさんのおんどり』より
2012年　©Mohammad Ali Baniasadi

(図7)ニコライ・ティーティネン『命のしずく』より　2010年　©Nikolai Tiitinen

(図8)パブロ・セラーノ
『アステカ帝国征服を助けた
王女マリンチェの物語』より
2011年 ©Pablo Serrano

日本からは、受賞者 2 人を含む 13 人が参加しています。国内審査を経てブラティスラヴァへ送られた作品はすべて、2011 年から 2013 年までに出版された絵本が対象ですので、「書店で目にしたあの絵本」の原画があるかもしれません。会場では、出版された絵本を手に取って比較しながら、原画作品をお楽しみください。

展示の後半では、「絵本をめぐる世界の旅」として、今回 BIB に参加した作品の中から、各国のユニークなイラストレーションを紹介します。日本を飛び出して、韓国、イラン、トルコ、イタリア、スペイン、フランス、スイス、ドイツ、チェコ、クロアチア、ポーランド、ラトビア、エストニア、フィンランド、メキシコの順に、地球を一回りしてみましょう。4 人の作家が登場するイランは、近年国際的な舞台でもめざましい活躍を見せています。過去の BIB でも度々紹介してきましたが、「詩の国」ならではの繊細な画面もあれば、大胆なコラージュを駆使した作品もあります【図 7】。あまり馴染みの無いトルコの作品をご覧いただいたあとは、ヨーロッパ大陸を寄り道しながら北上し、バルト三国から北欧フィンランドへと向かいます。ニコライ・ティーティネンによる『命のしずく』（2010 年刊）の文は、彼の父が児童劇として執筆したもので、独特の色彩感覚と瑞々しい表現が私たちの目をとらえるにちがいありません【図 8】。旅の最後はメキシコです。パブロ・セラーノによる伝統的な様式の研究と再現、それとは対照的なリチャルド・セラによるコミックの言語と絵本を組み合わせるという実験的な表現に、遠く地球の裏側の絵本に対する想像力をかき立てられることになるでしょう【図 9】。

［学芸員　山根佳奈］

関連イベント

■出品作家によるライブペインティング
出演：きくちちき（絵本作家／金のりんご賞受賞）
1月17日（土）13:00より16:00頃まで／1階プロジェクトルームにて／入場無料／時間内の会場への出入りは自由　＊来場者多数の場合は入場制限をすることがあります。

■えほんよみデリバリーチーム「おはなしpot」によるおはなし会
2月8日（日）13:00と15:00より／各回30分程度／1階プロジェクトルームにて／各回先着30名程度／参加無料
＊未就学児は保護者の付き添いが必要です。
＊大人の方の参加も歓迎しますが、希望者多数の場合は子ども優先とします。

■美術館ボランティアによる木版画多色摺体験
あらかじめ用意した版を使って摺り、栞をつくります。
1月24日（土）10:30〜12:00、13:00〜15:00　1階プロジェクトルームにて／当日先着100名／参加無料

ブラティスラヴァ世界絵本原画展 ―絵本をめぐる世界の旅―

2015年1月4日(日)▷3月1日(日)
［休館日］　1月5日（月）、2月2日（月）
［観覧料］　一般 800（640）円、大学生 560（450）円
※小・中学生、高校生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料
※（　）内は前売、団体20名以上、および市内にお住まいの65歳以上の方の料金
※前売券はローソンチケット（Lコード：32284）、セブンイレブン（セブンコード：033-784）、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口（3月1日まで）にて販売

机のうえの旅 ― 楽しい現代美術 ―

今回のブラティスラヴァ国際絵本原画展のテーマは、「絵本をめぐる世界の旅」だということです。今では海外を旅行する人はたくさんいます。北極や南極ですら、チケットを予約すれば行くことができます。あるいは、そんなに遠くに行かなくても、この千葉市美術館に来ることだって、ちいさな旅なんですよ、という人がいるかもしれません。

いちばんちいさな旅のはなし。そのむかし、あるヨーロッパの軍人が罰せられて、42日間自分の部屋にとじこめられました。どこにも行けない。たいくつしのぎに、彼は部屋の中を「旅行」することを思いついたといいます。この人は、部屋の中を旅した記録を本にまとめました（この本は以前、日本語にも訳されていましたが、残念なことに、今ではなかなか読むことができません）。

さて、部屋を旅行するとして、まず何が目につくか。少なくとも、机とかテーブル、イスぐらいはあるのではないでしょうか。この机あるいはテーブルというものは、日常の生活用品にはちがいありませんが、これが美術の世界では時としてふしぎなはたらきをすることがあります。

むかしから、絵は窓、額ぶちは窓のわくによくたとえられます。これは、わたしたちが生きている、この世界とはちがう、「べつの世界」を見せてくれる窓という意味です。宇佐美圭司（1940-2012）の《もう一つの世界地図》（1991）という絵の題名は、絵という「もの」の役割をうまく言い表しています。

それでは、彫刻とか立体の場合はどうでしょうか。絵とくらべてみれば、わたしたちと同じ空間のなかにある「もの」だから、鉛筆とか自動車、あるいは電卓とかわりはないかもしれません。けれども、彫刻がおかれている台とか机、テーブルは額ぶちに似たはたらきがあります。

今回展示する予定の清水九兵衛（1922-2006）や若林奮（1936-2003）の作品は、天板（テーブルの面のことです）がそのまま「べつの世界」の地面となっています。だってそうでしょう。若林の作品のように、実際の地面から大きなハエの頭？ がぬっと出ていたら、たいへんだ。あるいは、福岡道雄（1936年生まれ）のばあい、白く塗られた台は池の中であり、わたしたちが見ている「こちら側」の世界と切りはなされています。

小清水漸（1944年生まれ）の《作業台―三点セット》（1977）という作品は、このような現実の空間と、別の世界との境界がどこらへんから始まるか、という実験といってもいい。床に薄いベニヤ板を置き、わたしたちのいる空間から「べつの世界」が見えそうなところまで積み重ねています。三つの台の高さがそれぞれちがっている理由は、天板の広さ（面積）が大きければ、台の高さが低くても「べつの世界」に行きやすい、というためです。

いっぽう、斎藤義重（1904-2001）と吉澤美香（1959年生まれ）の作品は、わたしたちの身近な経験と結びけて考えるとわかりやすい。

小清水漸《デウカリオンの机》
1983（昭和58）年　千葉市美術館蔵

吉澤美香《無題（茶だんす）》、《無題（三脚）》、《無題（掃除機）》、《無題（テーブル）》1982（昭和57）年
千葉市美術館蔵

学校の机に落書きがあるのを見たことはありませんか。ここで最初の話にもどると、「絵」というものはなにも紙やカンヴァス（布）に描かれていなくてもいいわけで、吉澤のように「もの」の面であれば机の天板でも、あるいはイスの脚に描いてもいいことになります（実際にやったらダメですが）。その考えをふくらませていくと、絵がかけられている壁であっても、そのまま「別の世界」にすることもできないことではありません。斎藤の作品はこのような考えによるものです。

あるいは、草間彌生（1929年生まれ）の作品のように、テーブルや椅子に何かふしぎな、うねうねとしたいきもののようなものをたくさん貼り付けてもいいでしょう。これはちょうど、紙に絵の具で描くかわりに、毛糸や包装紙を貼り付けて絵を作ることと似ています。草間の作品は見るだけでなく、椅子にすわったり、ボートに乗ってみたら、自分が「べつの世界」に入った感じがいっそうするだろうけど、美術館では禁止しています（これは、作品をよごしたり、こわしたりするといけないからです）。

さて、それではこのような彫刻や立体と、絵や版画の中に描かれている机やテーブルの違いは何でしょう。このことを考えるために、今回は浜口陽三（1909-2000）とタイガー立石（1941-98）の版画作品をいっしょに展示してみました。

［学芸課長代理　藁科英也］

所蔵作品展　机のうえの旅 ―楽しい現代美術―

2015年1月4日(日)▷3月1日(日)
［休館日］　1月5日（月）、2月2日（月）
［観覧料］　一般 200（160）円、大学生 150（120）円
※（　）内は団体30名以上
※ 千葉県在住の65歳以上の方、小・中学生、高校生、および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料
※「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」ご観覧の方は無料

2015 年度上半期展覧会のお知らせ

歴代館長が選ぶ　千葉市美術館所蔵名品展	第一部：4月10日(金)－5月10日(日) 第二部：5月19日(火)－6月28日(日)
開館20周年記念 ドラッカーコレクション水墨画名品展(仮称)	5月19日(火)－6月28日(日)

※都合により予告なく展覧会名、会期、内容の一部が変更となる場合がありますのでご了承ください。

(上) 雪村周継《月夜独釣図》 室町時代

◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

2014年度下半期は右記の内容で行います。聴講は無料ですのでお気軽にご参加下さい。

[時間] 14：00より(開場は30分前)
[場所] 11階講堂
[定員] 先着150名(入場無料)

○第7回	11月29日(土)	「赤瀬川原平－千円札裁判時代の制作活動」 [講 師] 水沼啓和(当館主任学芸員)
○第8回	12月13日(土)	「赤瀬川原平交友録－1960年代を中心に」 [講 師] 水沼啓和(当館主任学芸員)
○第9回	2月7日(土)	「無縁寺心澄の生涯 —フォーヴィスムから児童書へ」 [講 師] 藁科英也(当館学芸課長代理)
○第10回	2月21日(土)	「BIBを楽しむ　こどもの目・おとなの目」 [講 師]山根佳奈(当館学芸員)

※都合により開催日、講座名、内容の一部が変更となる場合がありますのでご了承ください。変更の際は各展覧会のチラシ、ホームページ等にてお知らせいたします。

◎ 千葉市美術館「友の会」会員募集中

展覧会が何度でも観覧でき、展覧会図録も一割引で購入できる「友の会」入会が大変お得です。

[会員の特典]
○ 会員は、企画展や所蔵作品展を年間、何回でも観覧できます。
○ 会員の同伴者(3名様まで)は、団体料金で観覧できます。
○ ミュージアムショップで、展覧会図録やグッズを10%引で購入できます。(一部除外あり)
○ 会員対象の催しもあります。

	一般会員	学生会員 (大学・専門)	ファミリー会員 (ご家族4名様まで)
入会金	1,000円	500円	2,000円
年会費	2,000円	1,000円	4,000円

入会のお申し込みは美術館受付にて。

[開館時間]
10：00 -18：00 (毎週金・土曜日は20：00まで)
＊入場受付は閉館の30分前まで
[交通案内]
◎JR千葉駅東口より
○徒歩約15分
○バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩3分
○千葉都市モノレール県庁前方面行「葭川公園駅」下車徒歩5分
◎京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
◎東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く
◎地下に駐車場があります

[編集・発行]
千葉市美術館
〒 260-8733 千葉市中央区中央 3-10-8
TEL. 043-221-2311　FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
http://www.ccma-net.jp/
[発行日] 2014 年 10 月 31 日
[印　刷] 株式会社恒陽社印刷所

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art